昭和52年、東京・銀座の飯田画廊にて、報道陣に初公開した《種をまく人》《夕暮れに羊を連れ帰る羊飼い》
（山梨日日新聞社提供）

Teku-Teku
FEATURE

山梨県立美術館とミレー。

**山梨県立美術館は
1978（昭和53）年11月3日に開館し
今年40周年を迎えました。
「ミレーの美術館」として親しまれ、
世界的にも有数のコレクションを誇る
美術館のこれまでの歩みを、
井澤英理子学芸幹が語ります。**

開館当日の朝。徹夜で待つ人など、開館時間までには約400人が列をつくった

1979「ミレーとバルビゾン派」

1991「ミレー展」

1998「自然に帰れ ミレーと農民画の伝統」

1985「ミレー展 ボストン美術館蔵」

1993「バルビゾン派と日本」

2014「生誕200年 ミレー展」

山梨県と「ミレー」の運命的な出会い

「山梨県立美術館は山梨県の置県100年を記念して計画されました。当初は総合博物館を開設予定でしたが、当時の田辺国男知事が『ほとんどの博物館はレプリカとパネル展示ばかりで、これではいけない。本物でいきたい』と、まずは美術館をと考え、県農業試験場の跡地に建設しました。

開館にあたり、山梨の芸術家の作品以外にどのような作品を収蔵すべきかを検討する中で、初代館長・千澤楨治氏からバルビゾン派がよいのではないかとの提案がありました。日本の近代美術に関する作品はすでに収蔵している美術館があるので、西洋美術を集めることで差別化が図れること、また、自然の営みや農村風景などが山梨県と重なることから、バルビゾン派の作品を収蔵することに決定しました。そして、なんとそのタイミングで、ミレーの作品が売りに出る、しかも《種をまく人》という吉報が届いたのです。ミレーの油彩作品自体は多くありませんので、欲しいといってもなかなか市場に出るものではありません。《種をまく人》ほどの傑作に巡り合い、山梨県が購入できたことは本当に幸運だったと思います」

「ミレーの美術館」となり得たわけ

「当館が最初に購入したミレー作品は《種をまく人》と《夕暮れに羊を連れ帰る羊飼い》です。どの美術館でも目玉となる作品を買うことはありますが、当館の場合はこの2点で終わらすことなく、ミレーのさまざまな画業が紹介できるように、主題や制作時期を考慮し、《落ち穂拾い、夏》をはじめ肖像画、風景画など幅広いジャンルの作品を収集しました。現在ミレーの作品は70点、そのうち油彩画が12点となりました。これは世界的にも大変多い数だと思います。このように、地道に集め続けてきたことが『ミレーの美術館』といわれるゆえんだと思います。さらにバルビゾン派の価値や美術史的な位置をしっかりと示すためにルソー、ディアズ、トロワイヨン、デュプレなどのバルビゾン派の作品やクロード・ロラン、ライスダール、クールベなど西洋の風景画で欠かせない画家の作品もそろえました。

また、建物の改築、増築も進みました。通常、美術館はどのような作品にも合わせられるように白い壁が基調となりますが、ミレーとバルビゾン派に特化した『ミレー館』では第1室は赤色、第2室は緑色の壁とし、斬新でありながらも作品が映えるようにしています。さらに、収蔵庫も増築するなど目立たない部分もしっかりと充実させ、作品一つ一つを大切に保管しています。こうしたことは、文化の底上げにつながることであり、重要な取り組みであると思っています」

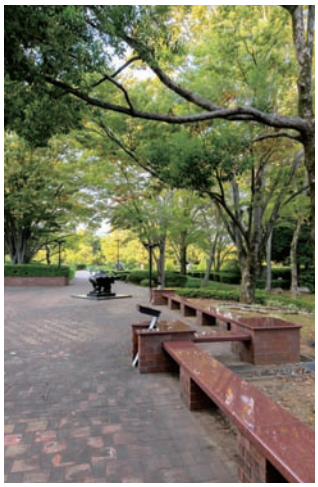
バルビゾンの庭に設置された「ミレーとルソーの記念碑」は、
フォンテーヌブローの森に設置されているものと同じブロンズ型から鋳造

訪れた皆さまに寄り添える美術館でありたい

「当館がある芸術の森公園には随所に彫刻が配置され、『バルビゾンの庭』にはミレーと親友ルソーの記念碑もあります。また、園内にはバラ園や日本庭園、ボタン園、さらに文学館もあります。四季折々の美しい自然が迎えてくれる公園の散策を楽しみながら、本物の芸術に出会い親しんでいただけます。

開館から40年が経ち、この美術館と出会ったことで、人生を変えるようなことが何かあったらと思い、皆さまから美術館との関わりをつづったエッセーを募集しました。開館当日に一列目に並んでいた方は『山梨の文化の夜明けだ』と感想を述べられました。《種をまく人》は、自分の気持ちと重ね合わせて見る方が多い作品で、ある人は、仕事などいろいろなことに迷っている時にこの絵を見て『自分はこのままでいい、ありのままでいいんだ』と思ったそうです。絵画は見る時々でいろいろな思いを抱けるものですから、何度も繰り返し訪ねてほしいと思っています。開館40周年を記念して作った当館のキャッチコピー『種をまく 世界がひらく』には、それぞれの世界が開いていくという思いが込められています。

親に連れられて来た子が、友だちと来て、恋人と来て、結婚して子どもを連れて来て、いつか孫を連れて来る…。そんなふうに人生の節目節目に、かしこまらずに来てもらい、その時の自分の気持ちなども反映させながら見ていただきたいと思います。私たちもその時その時の皆さまに寄り添える美術館でありたいと考えています」



山梨県立美術館

甲府市貢川1丁目4-27／TEL.055-228-3322

山梨県立美術館
井澤 英理子 学芸幹

山梨県立美術館40周年記念 新収蔵作品

「角笛を吹く牛飼い」

（油彩・板／38.1×27.9㎝）

一日の終わりを迎え、牧人が牛の群れを笛の音で呼び寄せています。この絵で特徴的なのは、やはり「彩り」。ミレーは大気が見せる微妙な表情を鋭敏な感覚で捉え、夕焼けをピンク、オレンジ、そして紫、青といった色彩で表現しています。山梨県立美術館に収蔵されている他の油彩画と比較しても、この明るく鮮やかな色彩は特徴的なものです。

制作年は不詳とされていますが、1850年代中期以降は、明るく細やかな風景表現の作例が増えていること、また本作に関連するデッサン（1854～57年頃）の存在などから、1850年代後期の作品であろうと推測されています。この頃からミレーはそれまでの人物主体の表現から、風景表現に重きを置くようになり、人々を取り巻く一つ一つの自然の景観を非常に大切に描くようになっていきます。そのようなことから、後年のミレーにつながる転換点の作例であるといわれています。

本作はミレーの死後、遺族（おそらく弟）が米国のコレクターに売り、1891年にミレーとも付き合いがあったボストンの法律家の手に渡りました。そして1908年にボストンで開催された展覧会に出品されて以降、広く一般の目に触れることはなかったと考えられています。そして今年、長い間専門家ですら情報を知り得なかった幻の名画が、山梨県立美術館に収蔵されたことで、実に約100年ぶりの一般公開となったのです。牛飼いが吹く角笛は、どんな音を響かせているのか…。そんな想像をしながら鑑賞するのも名画と触れ合う楽しみのひとつかもしれません。